



『稲盛と永守 京都発 カリスマ経営の本質』

名和 高司(著)
日本経済新聞出版
(2021/8)
1,740円

日本を代表する経営者の経営哲学・経営手法を比較して学びながら経営の本質に迫る一冊です。

【感想】

京都発の小企業から世界に冠たる大企業に育てた稲盛和夫氏、永守重信氏の経営について比較をしながら、コロナ後の新たな世界を切り拓く経営のヒントを説いています。

稲盛氏といえば「フィロソフィ」(素直な心、感謝、利他など「心」を起点)と「アメーバ経営」

永守氏といえば「3大精神」(①情熱、熱意、執念 ②知的ハードワーキング ③すぐやる、必ずやる、出来るまでやる)」と「3大経営手法」(①家計簿経営 ②千切り経営 ③井戸掘り経営)」

ですが、共通点は、「志」から出発していること・人の心をベースにしていることです。

近年、世界の優良企業では、ミッションではなく、パーパス(志)という言葉へシフトしており、20世紀型の資本経営・・・Mission(使命)、Vision(構想)、Value(理念)から

21世紀型の志本経営・・・Purpose(志)、Dream(夢)、Belief(信念)

へ変化していると言われていています。違いは分かりづらいですが、前者は、「外から与えられたもの・義務感・表面的」というイメージで、後者は、「心から湧き上がってくる思い・わくわくするような未来・心に刻まれた信念」という捉え方で、外発的か内発的かという違いがあるようです。

新年がスタートしましたが、「どうあるべきか?」「誰のために、何をしたいのか?」「どんな未来を創りたいのか?それはなぜか?」を考えていく上で、非常に示唆に富んだ内容となっています。

【以下引用】

・「会社の経営を究極まで突き詰めていくと、実に単純明快なことが導き出されます。それは、原理原則にしたがって、当たり前のことを当たり前にやっていくことで、これ以上でもなければ、これ以下でもありません。『継続は力なり』という言葉がありますが、一切の妥協や譲歩を許さず、誰にでもわかっている当たり前のことを、淡々と持続させていくこと以外に成功する極意も秘訣も存在しません」(永守氏)

フィロソフィーは、「当たり前のことを、いかに実直に実践するか」こそが、問われているのである。

・「考え方」が正しく、「熱意」が備われれば、能力を高め続けることができる。

「熱意」について、稲盛は人を3つのタイプに分ける。火を近づけると燃え上がる可燃性、火を近づけても燃えない不燃性、自分で勝手に燃え上がる自然性の3つだ。「不燃性の人間は、会社にいてもらわなくてけっこうだ」 どうすれば「自然性」の人間になれるか。その最大にして最良の方法は、「仕事を好きになる」ことだと説く。

・「リスクに見舞われた時こそ、経営者は前を見ないといけない。大局観を失わず、恐れずに動くべきだろう」と永守は語る。この決断力こそ、永守経営の真骨頂である。それを筆者は JQ(判断指数)と呼ぶ。IQ(知能指数)、EQ(感性指数)、そしてこの JQ が、永守経営の3拍子なのである。

著書を読むことで、これから益々、「人の心」をベースにした人を大切にする経営という思想が重要になってくるのだと感じさせてくれます。